

明清文學史から見た清・顧沅の『聖蹟圖』贊詩

竹村 則行

一 はじめに

古今東西、史上に名前が残る世界の偉人は概ね實在人物である。しかし記録上の偉人の行状には、當時あるいは後世に付加された虚構表現が常に付き纏う。就中その人物が強大國家の獨裁者や當世流行の宗教の開祖であれば尙更である。そこでは國家や信仰の壓力によつて強調された虚構表現が多用され、それはやがて記録上の事實(史實)となつて後世に傳承される。このことは、秦の始皇帝や漢の武帝以來の中國の歴代皇帝、或いは釋迦や老子、キリストやマホメット等の偉大な指導者の事蹟を見るまでもなく明らかであろう。

春秋末期の中國に實在した孔子は、儒教の開祖として中國や周邊諸國において權力者や國民に當時から今日まで長く尊崇され、二千數百年後の今日も色濃く影響が残る偉大な人物である。早く『論語』に弟子との問答が記録され、司馬遷は『史記』「孔子世家」において「素王」たる孔子に貴重な一卷を割いてその傳記を記録する。『史記』の記事は努めて客觀的であるが、『說苑』や『孔子家語』『孔叢子』等の記事となると、眞偽を取り混ぜた孔子説話が多用されており、客觀實

證を重んじる研究資料としては慎重な検討を要する。ただそれらの書物の孔子描寫に虚構を多く含むとしても、後世の受け手は虚構説話も含めて孔子像を作り上げて傳承した事實は疑えない。

儒教は秦の始皇帝に徹底的に排斥されたが、次の漢代に國教となり、爾來約二千年、盛衰はありながらも變わらず歴代王朝の規範となり、中國及び近隣アジア諸國の文化に影響を與え續けた。その開祖たる孔子の場合、その在世時または直近の時代と、時隔を隔てた後世、とりわけ國教化した儒教が國を擧げて尊崇の對象となつて以後とでは、孔子像や孔子編著の解釋に顯著な變化を生じるのは當然であろう。先に擧げた『孔子家語』や『孔叢子』は原作者や補作者が明確ではないが、そこに記録された孔子説話には聖人孔子を尊崇するが餘りの虚構の美談や誇張表現が多く含まれる。

中國近世における孔子像や儒教研究について、淺學の筆者は知見に乏しいが、それでも孔子に關する當時の關連記述、とりわけ詩文について明清文學資料として捉える觀點から、一應の發言は許されるのではないかと思考する次第である。

さて、『孔子聖蹟圖』(『聖蹟圖』とも。蹟は一に迹、跡、續に作る)は、

「聖人」孔子の行狀を複数の連續する圖像・贊文・贊詩を用いて連環畫風に描いた作品である（中には贊詩や贊文を缺くものも含む）。管見の限り、その初出は元代であり、圖像の印刷技術が相當に發達した明清期においては各種各様の『聖蹟圖』が出現する。その後かなりの數の『聖蹟圖』が同時代の李氏朝鮮や江戸期の日本にもたらされ、それぞれに影響を與えた。今日、明清期に刊行された『聖蹟圖』が中國・朝鮮・日本等に傳存して圖書館・研究機關等に藏されており、それらの相當數が覆製刊行されて『聖蹟圖』研究に寄與している。今後『聖蹟圖』の中國・朝鮮・日本における傳播や圖像内容の分析、贊文や贊詩の解釋等についての総合的な研究が待たれる。現代中國では、早く鄭振鐸（一八九八―一九五八）が『中國古代版畫叢刊』に明正統九年刊『聖蹟圖』を影印して『聖蹟圖』研究の先鞭を付け、阿英（一九〇〇―一九七七）は『中國連環圖畫史話』において、連環畫の一環として『聖蹟圖』を取り上げる。これらは版畫や連環畫からの關心である。また今日の徐小蠻・王福康『中國古代插圖史』にも『聖蹟圖』への言及がある。その他、現代中國における『聖蹟圖』研究の論著は相當數を數えており、今後更なる深化發展が期待される。

こういう情況にあつて、中國明清文學を専攻する筆者の關心は、専ら贊詩（や贊文）を明清文學史の一資料として捉えることにある。即ち、元明清期に刊行された多數の『聖蹟圖』のうち、贊詩を有する四種の『聖蹟圖』（①元・俞和贊、②明・張楷贊、③清・蘭友芳贊、④清・顧沅贊）を専らの研究対象とする。具體的には最後出の④清・顧沅『聖蹟圖』の贊詩表現について、先行する②明・張楷贊、①元・俞和贊の『聖蹟圖』と比較検討しつつ、これらを明清文學史の基本資料と見なして比較分析を試みたい（詩表現の類似が比較的少ない③清・蘭友

芳贊については別途に考察したい）。

二 清・顧沅について

顧沅、字は澧蘭、號は湘舟、また滄浪漁夫等、蘇州吳縣は長洲の人である。その居所を辟疆園、藏書樓を藝海樓、賜硯堂等と稱した。後述の『今雨集』に附録する子孫顧翼東・顧其威等の記録によれば、その生没年は清・嘉慶四年（一七九九）―咸豐元年（一八五二）である。即ち顧沅は清朝後期の嘉慶―道光咸豐間の五十二年間を生きた、江南の著名な金石蒐集家、刊本抄書校書等の藏書家、及び編輯出版者である。馮夢龍や楮人穫を始めとして明清期の江南に生きた文人には珍しくないが、彼も科擧合格による官途¹¹立身出世の道を進まず、一民間文人として書物を愛玩し、當世の文人との交流に耽溺した生涯を送った。顧沅は文壇の脚光を浴びる文學作品の作者や政治權力を行使する顯官の道を選ばず、清代江南の文化界を下支えする書物蒐集や藏書、編輯出版に生涯の情熱を注いだ。そのためもあろう、彼自身の經歷（史傳、碑傳等）には不明な部分が多く、没後百六十年を経た今日、その傳記記事は断片的にししか傳わらない。ここでは、その乏しい記事を拾いつつ、顧沅の傳記、蒐集抄寫出版書目、あるいは交友録等について確認しておきたい。

まず、その傳記について、潘錫恩「湘舟顧君小傳」¹²に、

君幼岐嶷、稟性穎異、讀書輒過目成誦。不求仕進、不以科擧之學爲學。（君幼くして岐嶷、稟性穎異、讀書すれば輒ち目を過りて誦を成す。仕進するを求めず、科擧の學を以て學と爲さず。）

とあり、顧沅が幼少時から天賦の才能に恵まれていたこと、また科擧による出世を求めなかつたことを述べる。

次に、その突出した藏書量について、近人楊鍾義（一八六五同治四、一九四〇年）の『雪橋詩話』三集卷十一に、

顧湘舟藝海樓藏書、不及四庫六百餘種、而四庫未收者二千餘種、亦吳下嗜古之巨擘也。（顧湘舟（沅）の藝海樓藏書は、『四庫（全書）』に及ばざるもの六百餘種、而して『四庫（全書）』に未だ收めざる者二千餘種、亦た吳下（江南）の古を嗜むものの巨擘なり。）

と述べ、その江南隨一の藏書量が『四庫全書』にも匹敵し、『四庫全書』未收書目が二千餘種を数えたことを特筆する。

しかし、好事魔多しの喩え通り、その膨大な藏書は後に清末江南の動亂の際に、時の蘇州巡撫によって持ち去られるという憂き目に遭う。即ち、葉昌熾（一八四九—一九一七年、顧沅より一世代後の蘇州の著名な藏書家）の『藏書紀事詩』卷六に次のように述べる。

吳下名園顧辟疆 吳下の名園 顧辟疆

蛾眉列屋爲添香 蛾眉 屋に列なり 爲に香を添ふ

荒攤敝紙難收拾 荒攤 敝紙 收拾し難く

竟使遺聞付夢梁 竟に遺聞をして夢梁に付せしむ

前二句は華美を極めた頃の顧沅の辟疆園を描くと思われる。東晉の顧辟疆や明末清初の冒襄の辟疆園の像が重なるであろう。後二句は、葉昌熾の案語によると、顧沅の辟疆園の藏書が咸豐庚申（一八六〇）の亂を経て、悉く蘇州巡撫の丁日昌に持ち去られて以後、葉昌熾が北京の瑠璃廠の古本屋臺で偶然に顧沅刊本の端本三冊を目睹することがあって感懷を催したものである。丁日昌『持靜齋書目』に多數記録される「顧沅所藏」「顧沅抄本」等の藏書記はこの間の経緯を證言するものであろう。その夥しい顧沅藏書の行方について、筆者は未確認で

あるが、幸いに瞿冕良編『中國古籍版刻辭典』「藝海樓」條に刻本十九點（『聖蹟圖』を含む）、抄本二〇一點、稿本五點に上る多數の書目を記録する。これらは顧沅が蒐書抄書刻書に生涯の情熱を注いだことの證しであろう。

以上の記述からも、幼少時から類い稀な才能を有していた顧沅が官途による出世を望まなかったこと、圖書への愛着が強く、生涯に渡って蒐集した藏書量が當時江南隨一であったこと、惜しいことにその多くが動亂の際に他人に持ち去られたこと等が判明する。更に後述の『今雨集』附録の顧其威氏の追憶文によると、近年の「十年浩劫」（文化大革命）によって顧家の藏書はその殆どが掠め取られたが、幸いに同族の顧廷龍氏の盡力によって『今雨集』は辛うじて難を逃れた由である。以下、その『今雨集』について紹介する。

『今雨集』は顧沅と生涯の親交が篤かった友人知人が寄せた序跋や題記、書翰、詩社での唱和（顧沅作を含む）、及び顧沅の頌壽文等から成る。『今雨集』には詩社での唱和を記録した中に顧沅自身の唱和詩も含まれており、單なる藏書家ではない文人詩人としての顧沅の面目を併せ見せる。これらの詩文は、進士官人としての経歴を踏まず、従って履歴や傳記に乏しい顧沅の日常の交友の實態を知り得る貴重な資料である。書名の「今雨」は杜甫の「秋述」文（『杜詩詳註』卷二十五）に「舊雨來、今雨不來」とあるのに由來し、雨の日も訪問を厭わない親友との交流を意味する。『今雨集』所載詩文の内容は多岐に涉るが、いま架藏本に記された顧翼東氏の存目を参照すれば、大約以下の五部に分けることが可能であろう。

一 刊本・抄本の序跋類：賜硯堂叢書序・聖廟祀典圖考序・吳郡名賢圖傳贊序・吳郡文編序・乾坤正氣集序等。

- 二 辟疆園の山水建築等の序記類：辟疆小築序・藝海樓藏書記等。
- 三 書簡と書畫題跋類：各種書簡、題滄浪亭圖・題古泉精舍圖等。
- 四 辟疆園での詩社や江南旅游での題序類：題莫愁酬唱圖・題吳中訪碑圖等。
- 五 顧沉の頌壽類：湘舟三十生辰序・湘舟四十初度序・祝湘舟五十壽。祝湘舟五十壽題畫詩等。

これらは内容上の重複を含むが、今、顧沉の詩人（詩作の作者）としての面目を窺わせる一例として次の作品を挙げる。

綠楊城郭影靡蕪

綠楊の城郭に靡蕪（筆者注：せんきゅう。香草）影やく

打槩中流入畫圖

槩を中流に打れば畫圖に入れり

兒女英雄同一夢

兒女英雄 同一の夢

勝棋樓傍莫愁湖

勝棋樓は莫愁湖に傍へり

この詩は莫愁湖の湖心から莫愁ゆかりの勝棋樓を眺めて詠んだ詩と思われる。自ら故事中の一人物となった顧沉の感懐が直に傳わってくる。『今雨集』卷十四冒頭の詩題によれば、これは丙申（一八三六道光十六年）暮春に顧沉ら一行が南京の莫愁湖に遊び、詩を賦して贈答した際の顧沉の原唱詩（四首其一）である。時に顧沉三十八歳、『今雨集』に載せる和韻詩の同人は三十二名を數える。専門詩人でない顧沉の詩作は多くないが、『今雨集』にはこの他に相當數の顧沉の贈答詩を収録しており、當時の江南における文人交遊の一端を如實に窺うことができる。

以上のことから、筆者は清朝後期の江南蘇州に生きた顧沉について、凡そ次のように概括しておきたい。

清朝後期の江南蘇州に生きた顧沉は幼少時から天賦の才能に恵ま

れ、特に書物の蒐集には異常な嗜好があった。科舉合格による出世の道を選ばず、生涯に渡って江南文人との交遊や書物等の蒐集・編集・出版に意を注いだ。その藏書は當時江南随一とされたが、殘念ながら清末の江南の動亂、更には近年の内亂（文化大革命）を経てその膨大な藏書は失われ、今日手許には殆ど殘存していない。

三 清・顧沉の『聖蹟圖』について

顧沉の『孔子聖蹟圖』は、その著『聖廟祀典圖考』に『孟子聖蹟圖』と共に附載される。『聖廟祀典圖考』には同郷の彭希鄭による「道光丙戌」（六年、一八二六）年の序文を載せる。この序文に「孔孟聖迹圖」に言及することから、『聖蹟圖』はこの年には完成していたことが分かる。顧沉の生年嘉慶四年（一七九九）からすれば、この年顧沉は二十七歳の若年である。上述の潘錫恩「湘舟顧君小傳」に「君幼くして岐嶷、稟性穎異」と述べることも、『聖蹟圖』が顧沉の若年の秀作であることと呼應する。顧沉の『聖蹟圖』編輯の意圖について本人の發言は不明だが、彭希鄭の次の敘述が参考になる。

我朝列聖、崇儒重道、聖聖相承。自世宗憲皇帝雍正二年、至今上道光六年、歷有增祀、惜洪氏書後、未有繼作者。同里顧君湘舟、因諸書之互異缺略、輯爲聖廟祀典圖考五卷、附以啓聖祀考・孔孟聖蹟圖。廣蒐博采、正其訛謬、訂其異同。（略）今見顧君是書、喜其蒐羅之廣博、考核之精詳。（下略）（我が朝は列聖儒を崇び道を重んじ、聖聖相ひ承く。世宗憲皇帝雍正二年（一七二四）より今上道光六年（一八二六）に至る、歴増祀有るも、惜しむらくは洪氏の書（引用者注：「文廟紀略」）の後未だ繼作する者有らず。同里の顧君湘舟、諸書の互ひに異なり、缺略あるに因りて、輯め

て『聖廟祀典圖考』五卷を爲し、附するに「啓聖祀考」「孔・孟聖蹟圖」を以てす。廣く蒐め博く采り、其の訛謬を正し、其の異同を訂す。(略)今顧君の是の書を見るに、其の蒐羅の廣博と考核の精詳なるを喜ぶ。(下略)

この序文で彭希鄭は、清朝における儒教や孔子關係の典禮資料の混亂を正す爲に顧沅が關連書籍を廣く涉獵蒐集し、嚴密に考證して『聖廟祀典圖考』を編集し、「聖蹟圖」を附載したものと述べる。同郷人の褒辭ではあるが、顧沅の『聖廟祀典圖考』や「聖蹟圖」編集の意圖はほばこの方向であったかと思われる。ただそれにしても、青年文人の顧沅がこのような編著に取りかかる情熱の根源や多額の經費の出處等については依然不明である。

以下には、六十八種を數える顧沅の『聖蹟圖』のうち、紙幅の關係もあり、第一「尼丘禱祠」、第六十一「西狩泣麟」の二例について、贊文の出典、贊詩の解釋等について實例を擧げて検討したい。

まず「尼丘禱祠」における贊文・贊詩は次のようである(句讀點「」や訓讀は引用者、不鮮明箇所は諸本によって補った。以下同じ)。

『語』云、孔子母徵在禱于尼山、而生孔子、首上圩頂象尼丘、因名丘、字仲尼。按、叔梁紇有九女而無子。妾生孟皮、字伯尼、有足病。于是乃求婚于顏氏。顏氏有三女、其小曰徵在。顏父問三女曰、「陔大夫父祖爲士、然其先聖王之裔。今其身十尺、武力絕倫。雖年長性嚴、不足爲疑。三子孰能爲之妻。」二女莫對。徵在進曰、「從父所制。何問焉。」父曰、「即爾能矣。」遂以妻之。徵在既往廟見。以夫之年大、懼不時有孕、而私禱尼丘之山、以祈焉。顏氏升之谷、草木之葉上起、降之谷、草木之葉皆下垂。

贊 尼山巖巖 魯邦所瞻 降靈自母 孕聖歸男

既驗以形 遂命以名 草木震動 萬古文明

(尼山は巖巖として 魯邦の瞻る所なり 靈を降すこと母よりし 聖を孕みて男に歸す 既に驗するに形を以てすれば 遂に命じて以て名あり 草木は震動し 萬古文明なり)

この部分の贊文贊詩において、冒頭に『語』と明記するように、顏徵在が尼丘山に男兒出生を祈願した結果、めでたく孔子が誕生したという説話が『孔子家語』に出據することを明記する。そしてこの記事は清の顧沅が最初ではなく、次に示すように、實は先行する元・俞和や明・張楷題(何廷瑞補)の『聖蹟圖』に既に見えるものである。

○元・俞和贊(圖題無し)

按、『家語』、孔子母徵在禱于尼山、而生孔子、因名丘、字仲尼。

『史記』雖不載其事、實誕聖之本、故錄於首云。

尼山巖巖 魯邦是瞻 降靈自母 孕聖歸男

既驗以形 復徵以名 一誠感格 萬古文明

○明・張楷贊(何廷瑞補)(圖題無し)

『家語』云、孔子母徵在禱於尼山、而生孔子、首上圩頂象尼丘、因名丘、字仲尼。『史記』雖不載其事、實誕聖之本、故錄

於首云。贊曰、(引用者注：圖贊は第三圖中に轉記する。)

尼山巖巖 魯邦是瞻 降靈自母 孕聖歸男

既驗以形 遂徵以名 一誠感格 萬古文明

この部分の比較検討から、贊文や贊詩表現、更には別添圖像からも分かる通り、圖像の構成も含め、顧沅の『聖蹟圖』「尼丘禱祠」の表現が、先行する『聖蹟圖』のそれを踏襲して新たに述べ直したものであることが明らかとなる。顧沅の贊文が出典に忠實であり、分量も多

いのは、前二者が一幅の圖像の餘白内に贊詩と贊文を題するのに對し、顧況の『聖蹟圖』は一頁を圖像、一頁を贊詩と贊文に充て、餘白を十分に取る體裁から來るものと考えられる。



圖① 顧況『聖蹟圖』1「尼丘禱嗣」

贊	尼山巖巖魯邦所瞻降靈自母孕聖歸男既	驗以形遂命以名草木震動萬古文明
---	-------------------	-----------------

諸云孔子母徵在焉于尼山而孔子首上野而
 象尼丘名孟皮字仲尼按叔梁紇是問乃求女而
 無氏生三女伯尼曰有聖徵在焉今其身能十
 尺武夫祖為年長其性嚴不從父所制子其問焉
 父曰爾能對徵之私微尼丘往見焉
 顏氏升穀木之葉皆起降之草木以焉
 顏氏下垂

次にもう一例、「西狩泣麟」について、以下に元・俞和と明・張楷と清・顧況の順に贊文・贊詩を掲げる。

○元・俞和贊〔圖題無し〕

十四年、孔子居魯。西狩獲麟、衆莫識、棄之五父之衢。冉有告曰、「麕身而肉角、豈天之天乎。」夫子往觀焉、曰、「麟也。麟出而斃、吾道窮矣。」

王降而伯 雅亡而風 麟出斃矣 吾道其窮

既歌以哀 復史以彰 非徒物感 實爲世傷

○明・張楷贊〔圖題無し〕

十四年庚申、魯西狩獲麟。孔子感而作『春秋』。按、『孔子叢』(孔叢子)曰、「叔孫氏樵而獲麟、衆莫之識、棄之五父之衢。垂有(冉有)告者曰、「麕身而肉角、豈天之天乎。」夫子往觀之、泣曰、「麟也。麟、仁獸也。出而死、吾道窮矣。」贊曰、

王降而伯 雅亡而風 麟出斃矣 吾道其窮

既歌以哀 淚復沾裳 匪爲物感 實維世傷

○清・顧況贊〔西狩泣麟〕

十四年庚申、魯西狩獲麟。孔子感焉作『春秋』。按、『孔子叢』曰「叔孫氏之車士曰子鉏商、采薪於大野、獲麟。折其前左足、載以歸。衆莫之識、棄之五父之衢。使人告孔子曰、「有麕而角者、何也。」孔子往觀之、曰、「麟也。胡爲乎來哉。」反袂拭面、涕洟沾袍、曰、「吾道窮矣。」乃曰、「唐虞世兮麟鳳遊、今非其時、來何求、麟兮麟兮我心憂。」

贊 王降而霸 雅亡而風 麟出斃矣 吾道其窮

既歌以哀 復史以彰 匪徒物感 實爲世傷

(王は降りて霸となり 雅は亡びて風となる 麟出でて斃

れたり 吾道其れ窮せり 既に歌ひて以て哀しみ 史を復して以て彰はす 徒に物に感ずるが爲に匪ず 實に世の傷むが爲なり)



圖② 顧沅「聖蹟圖」61「西狩獲麟」

十四年庚申魯西狩獲麟孔子感焉作春秋按孔叢子曰叔孫氏之車士曰子鉏商采薪於大野獲麟折其前左足載以歸衆莫之識棄之五父之衢使人告孔子曰有麇而角者何也孔子往觀之曰麟也胡爲乎來哉反袂拭面涕洟沾袍曰吾道窮矣乃曰唐虞世兮麟鳳遊今非其時來何求麟兮麟兮我心憂

贊 王降而霸雅亡而風麟出斃矣吾道其窮既歌以哀復史以彰匪徒物感實爲世傷

明清文學史から見た清・顧沅の『聖蹟圖』贊詩

村の獵師に狩られた麒麟を見て、自らの天命を悟った孔子が慨嘆したという有名な説話は、『春秋左氏傳』哀公十四年、『史記』卷四十七、『孔子家語』卷四等にも見えるが、顧沅・張楷・俞和ともに直接には『孔叢子』に據っている。三者の表現を比較すれば、この部分も先の「尼丘禱嗣」と同じく、顧沅が先行する二者、とりわけ時代が近い張楷の贊文・贊詩（更には圖像）を踏襲し、表現を若干修正して敘述していることが一目瞭然である。

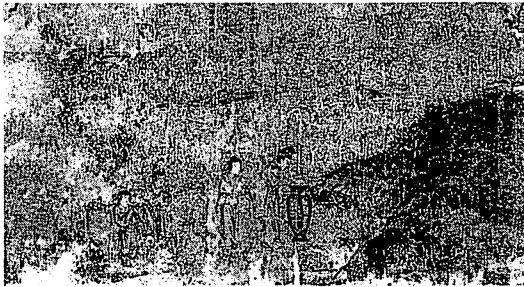
では、顧沅の『聖蹟圖』全體では、先行する『聖蹟圖』の表現をどれほど踏襲し、また先行例を見ない設定がどれほどあるだろうか。今、顧沅の『聖蹟圖』六十八題に通り番號を付し、先行する元・俞和、明・張楷の『聖蹟圖』との踏襲關係を示せば次のようである。

（注：俞は俞和、張は張楷の圖贊を示す。22 麒麟垂訓等の反轉題目は顧沅による新增が考えられる題目を示す。）

- | | | |
|-------------|--------------|--------------|
| 1 尼丘禱嗣 (俞張) | 2 麟吐玉書 (張) | 3 龍繞星降 (張) |
| 4 天樂文符 (張) | 5 少陳俎豆 (張) | 6 初任委吏 (張) |
| 7 載官乘田 (張) | 8 賜鯉定名 (張) | 9 問禮老聃 (張) |
| 10 問官郊子 | 11 傾蓋贈帛 | 12 學琴師裏 (俞張) |
| 13 訪藥衰弘 | 14 觀周歌器 | 15 圖像興懷 |
| 17 釐廟知災 | 18 在齊問韶 (張) | 19 嬰沮齊封 (張) |
| 20 遇塗對貨 | 21 杏壇設教 (張) | 22 鯉庭垂訓 |
| 23 治宰申鄰 | 24 夾谷却萊 (張) | 25 歸田謝過 (張) |
| 26 三鄰墮城 | 27 誅邪兩觀 (張) | 28 受樂遊行 (俞張) |
| 29 封人請見 | 30 圍匡曲解 (俞張) | 31 獵公郊迎 |
| 32 次乘靈公 (張) | 33 習禮伐檀 (張) | 34 東門貽誥 (俞張) |
| 35 陳庭辨矢 (張) | 36 寄心擊磬 (張) | 37 臨河返駕 (俞張) |



圖③ 元・俞和題「孔子聖蹟圖」



圖④ 明・張楷題「孔子聖蹟圖」

以上の例示から、顧沅『聖蹟圖』六十八題のうち、(俞張)印を付した半数の三十四題は、先行する俞和や張楷の『聖蹟圖』を踏襲していることが分かる(紙幅の関係もあり、全ての表現の踏襲を明示することはできないが、これら三十四題はほぼ上述事例の「尼丘禱祠」と同様、先行する『聖蹟圖』の贊文贊詩の表現に酷似する)。逆に他の『聖蹟圖』のようにならぬ反轉文字で示した三十四題については、顧沅が表現を踏襲した俞和・張楷以外の先行作品が今後発見される可能性はあるが、筆者の管見の限り、顧沅が獨自に設定した新しい題目ということになる。なお上述の事例にも示したが、圖像や贊文、贊詩に描かれた故事の主な出典は、先行例の有無に関わらず、『史記』『孔子世家』、『論語』『孔子家語』『孔叢子』等である。

以下には、顧沅の『聖蹟圖』において、俞和や張楷の『聖蹟圖』に先行例が見えない三十四題のうち、第二十二「鯉庭垂訓」と第四十五「接輿歌鳳」について検討する。紙幅の関係で前者の圖像は省略するが、その贊文と贊詩はそれぞれ次のようである。

- | | | |
|-------------|-------------|-------------|
| 38 東流喻德 | 39 觀臺釋戮 | 40 禮衰去衛(張) |
| 41 在陳當阨(張) | 42 葉公問政 | 43 反蔡迷津(張) |
| 44 楚封見沮(俞張) | 45 接輿歌鳳 | 46 季康幣迎 |
| 47 作荷蘭操 | 48 魯識犢羊 | 49 專車論吳 |
| 51 商羊知雨 | 52 遽使談心 | 53 貴黍踐桃 |
| 55 筮實損益 | 56 夢見周公 | 57 杖叩原壤 |
| 58 經成錫璜(張) | 59 互鄉與潔 | 60 刪述六經(俞張) |
| 61 西狩泣麟(俞張) | 62 夢奠兩楹(張) | 63 心喪廬墓(張) |
| 64 塚誌興亡 | 65 漢高崇祀(俞張) | 66 壁藏謨典 |
| 67 鍾離完璧 | ※孔廟植檜 | 68 眞宗拜祀 |

【鯉庭垂訓】孔子嘗獨立。鯉趨而過庭。曰、「學詩乎。」對曰、未也。「不學詩、無以言。」鯉退而學詩。他日又獨立。鯉趨而過庭。曰「學禮乎。」對曰、「未也。」「不學禮、無以立。」鯉退而學禮。

聖道淵源 厥有統系 庭教既端 箕裘克繼
學詩學禮 體用咸備 式穀似之 繩繩弗替

(聖道の淵源は厥れ統系有り 庭教既に端にして 箕裘克く繼ぐ 詩を學び 禮を學ぶ 體用咸く備はれり 穀を式ふる こと之の似くすれば 繩繩として替らず)

引用は省くが「鯉庭垂訓」の贊文は『論語』季氏篇そのままである。
【接輿歌鳳】楚狂接輿歌而過孔子。曰、「鳳兮鳳兮、何德之衰。往者不可諫、來者猶可追。已而已而。今之從政者殆而。」孔子下欲與之言。趨而辟之。不得與之言。

兕虎載歌 鳳胡來儀 覽輝而下 德衰匪宜
雞啄鳳食 從政其類 含苞斂符 萬世之瑞

(兕虎載ち歌ふに 鳳胡ぞ來儀せん 輝を覽て下り 德の衰へたるは宜に匪ず 雞啄み 鳳食ふ 政に従ふは其の類なり 苞を含みて符を斂む 萬世の瑞なり)

楚の隱者狂接輿が孔子を諫めたという有名な故事を述べるこの贊文も、引用は省くが『論語』微子篇そのままである。

以上の『聖蹟圖』贊文が述べる二つの故事は、偶々『論語』からのそのままの引用である。先行する俞和や張楷の『聖蹟圖』に見えない他の三十二圖の贊文についても、事情はほぼ同様であり、一一の論證は省くが、顧沅は『論語』以外に『史記』の「孔子世家」、『孔子家語』『孔叢子』等の人口に膾炙した孔子故事関連書物から引用した贊文を書き連ねている。



圖⑤ 顧沅『聖蹟圖』45「接輿歌鳳」

楚狂接輿歌而過孔子曰鳳兮鳳兮何德之衰往者不可諫來者猶可追已而已而今之從政者殆而孔子下欲與之言趨而辟之不得與之言
贊 兕虎載歌鳳胡來儀覽輝而下德衰匪宜雞啄鳳食從政其類含苞斂符萬世之瑞

以上、一部のみの論證ではあるが、これまでの検討から、顧沅の『聖蹟圖』贊文・贊詩及び圖像について、ほぼ以下のことが分かる。
(一) 贊文について：俞和や張楷の先行例がある三十四題はほぼその表

現を襲用し、『論語』・『史記』「孔子世家」・『孔子家語』・『孔子家語』等のよく知られた書物から引用すること。また他の三十四題の出典もほぼ同様であること。

(二) 贊詩について：兪和や張楷の先行例がある三十四題はほぼその表現を襲用しているが、先行例を見ない他の三十四題については、顧況の獨自設定である可能性が高いこと。

(三) 圖像について：兪和や張楷の先行例がある三十四題はほぼその圖像の構成を襲用していること。

四 清・顧況の『聖蹟圖』の古さ(踏襲)と新しさ(新奇)

孔子の語録『論語』爲政篇に「故きを温めて新しきを知れば、以て師と爲るべし」とある。周知の「温故知新」の解釋は後世微妙に變化するようだが、淺學の筆者はここで解釋の變遷に立ち入る餘裕は無く、辭書的に「古人の思想や學問等を繰り返し學習し、そこから現實に對應した新しい知識や道理を見出すこと」と解しておく。孔子のこの言葉が具體的に何を指すのか定かではないが、「温故知新」は思想や學問のみならず一般の事象についても當てはまる含蓄深い熟語である。例えば繪畫や音樂、書道やスポーツ、更には各種の習い事等について考えても、弟子や後人は師匠や先人の型(故)に繰り返し習熟することによって、その中から始めて新しい型が生み出され、やがてその新型が古例となつて後世に傳承されて行くのが通常である。孔子を開祖とする儒教の學問についても、この「温故知新」の原理はそのまま適用でき、孔穎達や朱子、王陽明、朝鮮の李退溪や江戸の林羅山等の大學者にしても、その學說の新しさは、つまるところ傳統の學

問に徹底的に習熟するところから出發している點では共通するように思える。また中國文學史の所謂古文運動についても、常に復古の體裁を以て革新が唱えられて來たことも想起される。以上を總括すれば、新しい事象は概ね古い傳統形式に習熟する中から生じるという原理を導き出すことが可能であろう。

この所謂「温故知新」の原理を顧況の『聖蹟圖』に適用すれば、その「古さ」として(一) 圖像構成の類似、(二) 贊文の出典及び表現の類似、(三) 贊詩の出典及び表現の類似の要素が挙げられ、また「新しさ」として、(四) それらの舊套を凌駕する内容の新奇さ、及び(五) 顧況『聖蹟圖』の書物形態の新しさが挙げられる。以下これらについて、重複する部分もあるが、それぞれ簡述する。

(一) 顧況『聖蹟圖』の圖像構成の先行作品との類似

紙幅の關係で全部を示すことはできないが、顧況『聖蹟圖』の六十八圖のうち、先行する王振鵬や張楷の『聖蹟圖』と重なる半數の三十四圖は、實はその圖像構成がよく似通っている(圖像参照)。これらは、圖像の制作者と讀者の間において認識を共有することが考えられ、それだけ讀者の印象が強まると思われる。筆者のこれまでの調査で先行例を見ない残り半數の三十四圖は、顧況『聖蹟圖』が新たに考案した新機軸の圖像と考えられる。

顧況『聖蹟圖』の圖像の制作者は孔繼堯である⁽¹⁹⁾。山東曲阜の出身で清末に蘇州に客居し、顧況編著の圖像の多くを手がけた孔繼堯は、數多く存在する孔子の末裔の一人であるとも考えられるが、系圖の詳細は不明である。顧況編『古聖賢像傳略』『吳郡名賢圖傳贊』⁽²⁰⁾に載せる圖像と『聖廟祀典圖考』附録『聖蹟圖』圖像とを比較すれば、『聖蹟

『圖』の圖像が孔繼堯作になることは明白である。『聖廟祀典圖考』にも「繪圖 玉峯孔繼堯研香」と明記する。孔繼堯が『聖蹟圖』の圖像を構想した時、どの先行作品を参照し、また独自の構圖を構想したかは不明だが、刊行された『聖蹟圖』の圖柄から逆に推測すれば、先行する『聖蹟圖』（元の俞和題・王振鵬畫、明の張楷題・畫者不詳）に載せられた構圖（即ち古）を参照し、その上で孔繼堯独自の人物像や背景（即ち新）を加味して作り上げたことが想定される。

(二) 顧沅『聖蹟圖』の贊文の出典及び表現の類似

前章でその一部について検討したが、顧沅『聖蹟圖』の贊文の出典は『論語』『史記』（孔子世家）『漢書』『後漢書』『春秋左氏傳』『禮記』『易經』『孔子家語』『孔叢子』『搜神記』『孟子』『韓非子』『說苑』『拾遺記』『宋書』『樂府詩集』『祖庭廣記』『宋史』等である（顧不同）。顧沅がこれらの古典から直接に引用したか、或いは他の叢書等の記述に據ったかは不明であるが、いずれも比較的よく知られた孔子故事關係圖書から引用していることが裏付けられる。これらの古典は當時の讀者にとっても馴染み深いものであり、それだけ讀者に深い印象を與えたことが推察できる。

(三) 顧沅『聖蹟圖』の贊詩の出典及び表現の類似

顧沅『聖蹟圖』の贊詩についても、その出典の範圍や先行する『聖蹟圖』贊詩との表現の酷似は、前項の贊文の場合とほぼ同様である。ただ贊詩は贊文における古典の引用と違い、表現の獨自性、凝縮度が高い。前章で一部検討したように、(A) 先行の贊詩表現を踏襲する三十四の贊詩と (B) 先行表現が見當たらぬ顧沅独自の贊詩表現

とでは、ここで述べる古さと新しさの意味合いが異なってくる。まず (A) の場合、筆者が既に拙稿²⁾において、元・俞和の『聖蹟圖』贊を踏襲した明・張楷の『聖蹟圖』贊について検討したと同様の事が顧沅『聖蹟圖』についても指摘できる。即ち、顧沅『聖蹟圖』贊の半分は先行する『聖蹟圖』贊の表現を踏襲するが、このことは明清期の文學現象とも密接に關連を持っており、當人を含めて關係者はその模倣の技術を賞賛されても、今日のように盗作や著作権違反云々を指摘されることは無かつたであろう。つまり、これらの顧沅『聖蹟圖』贊は古い表現を踏襲しつつ、その中に新しい内容を盛ろうとしたことになる。これも一つの「溫故知新」であろう。

(四) それらの舊套形式を凌駕する顧沅『聖蹟圖』の表現内容の新しさ

前章で検討した明・張楷と清・顧沅の『聖蹟圖』『尼丘禱嗣』の贊詩を以下に再び掲げる。

尼山巖巖	魯邦是瞻	降靈自母	孕聖歸闕	
既驗以形	遂徵以圖	一誠感格	萬古文明	(張楷)
尼山巖巖	魯邦所瞻	降靈自母	孕聖歸男	
既驗以形	遂命以名	草木震動	萬古文明	(顧沅)

末二句の表現が異なるとはいえ、顧沅の贊詩が張楷のそれを踏襲していることは明白である。論證は省くが、他の三十三首の贊詩も同様である。ここから顧沅贊詩の顯著な獨自性は見出し難いが、當時は明清文壇の風潮の影響もあり、圖像の贊詩において先行する贊詩に酷似した表現をすることは何ら批判の對象とはならなかつたと思われる。これとは別に、先行する贊詩が見當たらぬ三十四贊詩については、

顧沅の詩表現の獨自性が顯著である。前章では「鯉庭垂訓」と「接輿歌鳳」の二例のみに止まったが、その他の新たな三十四首の『聖蹟圖』贊詩には、顧沅の詩人としての面目が躍如として現れていると考えられる。これらについて、次章のまとめにおいて改めて考察する。

(五) 顧沅『聖蹟圖』の書物形態の新しさ

顧沅『聖蹟圖』の新しさは、その書物形態の新しさからも生じていると考えられる。即ち、元・俞和題（王振鵬畫）や明・張楷題の『聖蹟圖』における贊文や贊詩は繪圖の僅かな餘白に書き付けた題畫詩文であるのに對し、顧沅のそれは冊子體の二葉を使用し、一葉に圖像、一葉に贊文・贊詩を印刷している（圖像參照）。前者は餘白が狭小であるのに對し、後者は圖像・贊文・贊詩ともに描寫の餘白を十分に取る。『聖蹟圖』の形態は木刻・石刻・絹布・卷軸・冊子等様々であるが、中でも後出の冊子體の場合は體裁によつて贊文贊詩に多くの分量を費やせるという利點がある。清朝後期の江南蘇州において刊行された顧沅の『聖蹟圖』の内容の新しさについて考える場合、この冊子體という書物形態も見過ごすことはできない。

五 まとめ

清朝後期の蘇州に生きた顧沅は一般には金石蒐集家、藏書家、編輯者、出版者等として紹介される。文物の所藏者や編著者として彼の名を冠した多數の書物等はそのことを示す。しかし同時に彼は生涯多くの文人と交流し、自らも詩作を試みた文人であった。彼には著名な詩人のように詩集や文集こそないが、先に紹介した『今雨集』は文人としての活動を示す何よりの證據である。そしてその文學活動には、當

然當時の江南の文學思潮が色濃く反映されている。

清末刊行の顧沅の『聖蹟圖』は「孟子聖蹟圖」と共に『聖廟祀典圖考』に附録される。編者の顧沅の意圖は主に清末に亂れ氣味であつた儒教の典禮を正すことにあり、必ずしも『聖蹟圖』の編纂にのみ關心があつた譯ではないようである。しかしそれは六十八の圖像・贊文・贊詩を包含し、一葉に圖像、一葉に贊文と贊詩を配し、鮮明な印刷の堂々とした體裁を有し、『聖蹟圖』の集大成とも言える力作である。管見の限り、獨自の贊詩を付した『聖蹟圖』はこれ以後刊行されていない。そこに付された贊詩についても、文學作品の觀點から相應の關心が拂われて然るべきであると筆者は考える。

顧沅『聖蹟圖』の贊詩は、所謂五言や七言の詩體ではないが、文學の對象を文字で表現された全ての作品と廣く捉えれば、『聖蹟圖』の贊詩をも文學史の基礎資料に加えることは許されるであらう。拙稿をまとめるに當たり、繪畫に屬する圖像や、古典の抄録である贊文はともかく、文人（詩人）の本領が發揮される贊詩について、主に明清文學史の觀點から總括的に考えてみたい。

第三章に述べたように、顧沅の『聖蹟圖』六十八圖のうち、半數の三十四圖は先行の元・俞和や明・張楷の『聖蹟圖』に酷似する。これらについては、筆者が前稿において張楷『聖蹟圖』の贊詩について考察したように、先行作品の表現を踏襲する傾向が顯著であり、しかもそのことは、作者がその技術を賞贊されても何ら批判されることは無かつた、少なくとも今日の如く著作權侵害や盜作・剽竊を指彈されることは無かつたであらうと考えられる。

一方、先行例を見ない三十四圖の贊詩については、筆者の調査では、圖像構成、贊文引用を含めて顧沅の新規表現と考えられる。第三章で

は、先行例を見ない賛詩のうち「鯉庭垂訓」と「接輿歌鳳」の二例について検討したが、更に二賛詩例を追加すれば次のようである。

十七【釐廟知災】

天道無私 福善禍淫 釐廟一炬 見擬若親
變亂祖制 天災示懲 文武不殄 聖智過人

(天道私無く善に福し淫に禍す釐廟一たび炬ゆるに見擬ること親らみるが若し祖制を變亂すれば天災もて懲を示す文(王)武(王)殄さず聖智人に過ぐ)

二十六【三都隳城】

君尊臣卑 制有常規 家不藏甲 城無百雉
三都既隳 公室漸強 政化大行 聖武布章

(君は尊く臣は卑しきは制に常規有り家に甲を藏せず城に百雉無し三都既に隳たれ公室漸く強し政化大に行はれ聖武布く章かなり)

筆者の前稿⁽²⁾に指摘したように、二例の賛詩とも『孔子家語』に述べる有名な故事に基づいて表現する。孔子の偉業を稱えるこの賛詩は四言八句から成り、通常詩人が多用する五言七言詩とは異なるが、この賛詩から詩人願沅の特徴を読み取ることが可能である。これらの先行例を見ない三十四の賛詩表現は、實は願沅の全くの新規表現ではない。上記の「釐廟知災」例で言えば、釐・廟・知・災・天・善・禍・文・武・殄・過・聖・智・過人等の語は既に「孔子家語」「六本」に見える。やや誇張して言えば、願沅はこれらの出典を功名に點綴してこの部分の賛詩を表現したと言える。「三都隳城」「鯉庭垂訓」「接輿歌鳳」及び他の三十例も出典をうまくあしらって賛詩を功名に表現している點は同様である。

實は明清文學の表現の特徴の一つは、先行作品の表現の踏襲、剽竊にあると筆者は考える。このことの實例指摘は既に歐陽健氏が『隋唐演義』の小説表現について行っており、筆者も戯曲『驚鴻記』の踏襲表現について考察を試みたが、畢竟するに明代清代の文壇の風潮として先行表現の踏襲は常態であった。「文は秦漢、詩は盛唐」として李攀龍が推奨した手本とすべき模範例は、見識に乏しい後世の追隨者その精神を缺いて皮相の模倣となった時に、一段低い踏襲・盜作・剽竊といった體様に墮落する。それは詩文のみならず、戯曲や小説等についても同様であったのである。

清朝後期の江南に生きた願沅の賛詩表現も、當時の関係者から褒辭こそ受けても貶辭は少なかったであろうが、廣く見てこのような明清文壇に共通する文學思潮の中にあつたと考えられる。先に言及した「溫故知新」の熟語を援用すれば、願沅の『聖蹟圖』、就中賛詩は、先行する古い表現を再生して活用することで、清朝後期江南の文壇に即應した新しい『聖蹟圖』を創出したと言えるであろう。

注

- (1) 中國古典文學出版社、一九五八年。また上海古籍出版社、一九八八年。
- (2) 中國古典藝術出版社、一九五七年。『阿英全集』第八卷(安徽教育出版社、二〇〇三年)所收。また王稼句整理『中國連環圖畫史話』(山東畫報出版社、二〇〇九年)参照。
- (3) 上海古籍出版社、二〇〇七年。
- (4) 『聖蹟圖』の主要先行研究に以下の論著がある。中國論文の多くは佐藤一好氏の示教による。

- 【著作】加地伸行『聖蹟圖にみる孔子流浪の生涯と教え 孔子畫傳』（集英社、一九九一年）／俄軍主編『孔子聖迹圖』（敦煌文藝出版社、二〇〇四年）／成均館大學校博物館『孔子聖蹟圖』（二〇〇九年）
- 【論文】王裕昌『《孔子聖迹圖》賞析』（『圖書與情報』二〇〇四年六月）／李云『孔子・聖迹圖の繪刻與收藏初探』（『長沙大學學報』十九卷一期、二〇〇五年）／沈津『聖迹圖』版本初探（『書韻悠悠一脈香』所收、廣西師範大學出版社、二〇〇六年）／孔祥勝・上官茂峰『聖迹之圖』考析（『榮齋齋』二〇〇六年三期）／文宜『第三屆全國《孔子聖迹圖》創作理論與實踐研討會紀要』（『文藝研究』二〇〇六年二期）／拙稿「元・俞和『孔子聖蹟圖』贊を踏襲した明・張楷『孔子聖蹟圖』について」（九州大學人文科學研究院『文學研究』一〇七輯、二〇一〇年）／拙稿「願沅『聖蹟圖』贊詩訓釋稿（上）」（同前一〇八輯、二〇一一年）。
- (5) 願沅『今雨集』卷六所收の孫燮「藝海樓藏書記」に、辟疆園の位置について「爲園于封門西雙塔寺之側」とあり、封門の西、雙塔寺の傍と記す。蘇州の辟疆園は古く六朝晉の願辟疆（辟疆とも）の故事（『世說新語』簡傲篇）があり、近世では明末清初の文人冒襄、字は辟疆の命名とも絡むと思われる。ただ、この方面の事情に詳しい大木康氏によれば、現在の蘇州には辟疆園という名園は無く、願沅の辟疆園との関連も不明の由である。
- (6) 葉昌熾著、王欣夫補正、徐鵬輯『藏書記事詩』（上海古籍出版社、一九八九年）卷六所引。
- (7) 遼瀋書社、一九九一年、據求恕齋叢書影印、評點索引本。
- (8) 原文は次の通り。庚申（二八六〇咸豐十年）之劫、其所藏畫爲豐順丁中丞（日昌）梱載以去。（丁日昌）『持靜齋書目』所著錄、多其家書也。去歲己丑（一八八九光緒十五年）、余游瑠璃殿閣肆、在一荒攤見破書三冊、皆湘舟（願沅）哀刻、同時人贈言及所刻書序。（○内は引用者。注（6）に據る。江標の紅印初刻本同じ。）
- (9) 上海古籍出版社、二〇〇八年。
- (10) 齊魯書社、一九九九年。また同増訂本、蘇州大學出版社、二〇〇九年。主要刻本として『賜硯堂叢書新編』『乾坤正氣集』『吳郡名賢圖傳贊』『古聖賢像傳略』『聖廟祀典圖考』『滄浪亭志』『莫愁湖志』『今雨集』等の書目を載せる。
- (11) 筆者架藏本は、願沅の子孫に當たる願其威氏が父願翼東氏の遺命によって二〇〇三年十二月に影印刊行した『今雨集』の影印本である。版心に「賜硯堂」と刻する。道光二十九年（一八四九）刊、即ち願沅の逝去二年前に刊行された最後の刊本である。内容は『今雨集』二十四卷十六冊、及び附錄論文の願翼東「湘舟公事迹紀要」「《吳郡文編》の保存經過」、願其威「願沅編刻紀年表」、「埋沒了一ヶ半世紀的《今雨集》」等を合訂する。
- (12) 第一の和韻者である馬士圖は『莫愁湖志』（嘉慶乙亥一八一五年序）を編纂している。この詩游が催された二十一年前である。一方、願沅には『莫愁湖志』の刊本があるが、馬士圖編との関連は不詳である。
- (13) 願沅『聖蹟圖』贊については、拙稿「願沅『聖蹟圖』贊詩訓釋稿（上）」（九州大學人文科學研究院『文學研究』一〇八輯、二〇一一年）参照。（下）は同一〇九輯に登載豫定。
- (14) 神州國光社、一九〇八年影刊本。
- (15) 『明版彩繪孔子聖迹圖』、齊魯書社、二〇〇六年影刊本。
- (16) 『聖蹟圖』圖像の繪師は、元・俞和題のものは王振鵬であり、明・張楷のものとは不詳、そして清・願沅のものは孔繼堯である。
- (17) この部分の『聖蹟圖』に圖像と贊文と銘はあるが、贊詩は無い。

(18) また他の三十四題の圖像の構成についても、先行する他の『聖蹟圖』との類似性が認められる可能性があるが、これらについては筆者の調査が不十分であり、今後の課題としたい。

(19) 佐藤一好氏の指教によれば、何榮昌「顧湘舟與蘇州地方文獻」(『江蘇師院學報』一九八一年二期)、及び華人徳「蘇州古版畫概述」(『江蘇圖書館學報』一九九九年四期)にも孔繼堯への言及がある。

(20) いずれも『中國歷代人物像傳』(郭啓・廖東編、齊魯書社、二〇〇二年)所收。

(21) 上記注(4) 拙稿参照。

(22) 上記注(4) 拙稿参照。

(23) 歐陽健「《隋唐演義》綴集成帙考」(『明清小説叢考』中國文聯出版公司、一九九二年)所收。

(24) 拙著『楊貴妃文學史研究』(研文出版、二〇〇三年)所收「『驚鴻記』を襲用した『隋唐演義』の梅妃故事について」参照。

※本稿所載の『聖蹟圖』に用いた底本は次の通りである。元・俞和贊のものは神州國光社、一九〇八年影刊。明・張楷贊のものは山東友誼出版社、一九九九年重印(参考:『明版彩繪孔子聖蹟圖』、齊魯書社、二〇〇六年刊)。清・顧沅贊のものは綫裝書局、一九九六年影刊(『聖廟祀典圖考』所收。原本は道光六年刊)。